
『聞こえる』と『Am4:56のメリーゴーランド』

加藤アガシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『聞こえる』と『Am4：56のメリーゴーランド』

【Nコード】

N4356J

【作者名】

加藤アガシ

【あらすじ】

タイトル通り、『聞こえる』と『Am4：56のメリーゴーランド』の二つの物語を交互に関連しつつ、進めていきます。二元小説ってやつです。まあ、とにかく二つとも、心がふわふわ踊りだすような、超癒し系の物語です（笑）

『聞こえる』 ～ ～ (前書き)

二元小説で、『聞こえる』と『AM4…56のメモリーゴランズ』を交互に進めていきます。

『聞こえる』くゝ

『聞こえる』

くゝ

トオルが、忌々しい島村先生から出された忌々しい漢字の宿題をやっている、突然その音が聞こえた。

どおんどおんどくぐく

どおんどおんどくぐく

その音を聞いた時、トオルはゾワツと胸騒ぎがした。

その音はまるで映画に出てくるような、原住民が侵入者に対して警告をするような、そんな原始的で威圧的な音だったのだ。(トオルはそれ以来、この音を大地のリズムと呼ぶようになった)

しかし、この音がどこから発せられているのか、まったく見当がつかない。

トオルは4年前の入学当時に買ってもらった自分の学習機の下や、引き出しの中などを調べ、その音の正体を突き止めようとした。

どおんどおんどごごご

どおんどおんどごごご

まったくどこから聞こえるのか分からない。
もしかしたら、家の外からかもしれない。

そう考えたトオルは、階段を上り、三階の寝室へと向かった。
トオルの家の中では、そこにある窓が一番よく外を見下ろせる。

そして、両親のベットを踏み台にして、窓をがらりと開けると、ト
オルはそこから首を出した。
冷たい風が頬をくすぐる。

家の外を見下ろすと、特段、普段と変わりはない。
ただ、日曜だったせいか、誰ひとりいなかったし、車の通りもな
かった。

しばらく、トオルは窓の外に目を凝らしていたが、結局、謎の音を
発しているらしいものは見当たらなかった。

変だな。

そう思いながら、トオルは窓を閉める。

どおんどおんどびんびん

どおんどおんどびんびん

何もないのに、音はまだ聞こえる。

それどころか、だんだん大きくなっているような気さえする。

どおんどおんどびんびん

どおんどおんどびんびん

正体不明のその音に、いよいよ怖くなってきたトオルは、階段を駆け下り、逃げるように両親がいる一階のリビングへと急いだ。

どおんどおんどびんびん

どおんどおんどびんびん

その間もずっと、音は聞こえる。

『お母さん!!お父さん!!なんか変な音が・・・!?!?』

トオルがリビングに着き、その光景を目の当たりにすると、トオルは絶句した。

トオルの父母ともに、シャンデリアを模した照明器具から垂らした赤いヒモで、首を吊っていたのだ。

トオルは目の前の光景が理解できず、その場でただ呆然とした。

しかし次の瞬間、驚くべき事に、その両親の遺体どちらとも、ミシミシと音を立て、左右に揺れ始めた。
最初はゆっくりと、そしてだんだん加速を付け、振り子のようにブラブラと。

ビシッ！！

そして、突然、大きな音がすると照明の金具がはずれ、照明ごとヒモでぶら下がっていた二人の遺体はドスンと床に叩きつけられた。
その衝撃で、遺体から血や、汚物などの液体が流れ出る。

そのおぞましい光景にトオルはどうしていいのか分からず、何もできず、震えていた。

すると、ゆつくりと母親の首だけがトオルの立っていた方向へ傾き、異様に見開いたその目がトオルの姿を刺すように見つめてくる。

当然、トオルは恐ろしくてしかたがない。

だが、母親の遺体は、さらにトオルをじっと見つめる。もちろん、瞬きはしない。

死んでいるのだ。

死んでいて、なおトオルをじっと見つめているのだ。

あるいは、そう思えただけかもしれない。

偶然、顔がこちらに傾いただけかもしれない。

だが、すぐに、そうでないことを知る。

血だらけの母親の遺体は、ギギギギと口を開くと、やけに高音の機械みたいな声で喋りだした。

『トオおるちゃん。ダメじゃない。トオルちゃんもこっちに来なけあい？ねええ、あなたあアアア？』

『そウダあぞオ。オイデえ』

『うわああああああ！！！！！！！！！！！』

母親の遺体だけでなく、父親の遺体も低い声で話し出すと、怯えきつたトオルは絶叫しながら走り出した。
とにかく、ここから逃げなければ。。。

何なんだ、これは？

何なんだ、これは？

夢だろうか？

トオルはそんな風に気を動転させながら、そのまま家を飛び出し、
当てもなく走り続けた。

逃げなければ。

逃げなければ。

どおんどおんどじじじ

どおんどおんどじじじ

トオルが走って逃げる間も、ずっとその音はどいっかで鳴っている。

どおんどおんどいっ

どおんどおんどいっ

トオルは知らないうちに、『聞こえる世界』へと来てしまったのだ。そして、その音は少しずつ、しかし確実に、大きくなっていく。

どおんどおんどいっ

どおんどおんどいっ

聞こえる。

^U^U

『A M 4 : 5 6 の メ リ ー ゴ ー ラ ン ド 』 ～ 1 ～

『A M 4 : 5 6 の メ リ ー ゴ ー ラ ン ド 』

～ 1 ～

ドッキリと闇が落ちてきた夜、神崎ナリヒトは新宿にある小さな市民公園で月女と出会った。

月女。

彼女は何も纏わない姿で、公園のジャングルジムに巻きつくようにして倒れこんでいた。

そして、その上空から注がれる淡い三日月の光は、彼女のその透き通るような白い肌を、包み込むように照らし、若く美しい彼女の身体を妖艶に輝かせ、幻想的なものに、あるいは芸術的なものにさせた。

ナリヒトは見るからに怪しい彼女を、最初は放っておこうとした。

彼女が事件性があってそうしているのなら、色々と面倒なことになるからだ。

しかし、どうやら事件性の匂いはしない。

遠くから見て、外傷もなく、彼女がただ単に眠っているだけであることが確認できた。

飲みすぎて酔っぱらい、その場で倒れるように寝てしまう女性ならいくらでもいる。

その中に、一人くらい、酔うと全裸になってしまう人がいてもおかしくはないだろう。

居酒屋でアルバイトしているナリヒトは、今までにそういう脱ぎたくなる人種を何人か見たことがある。

もちろん、女性であつてもだ。

しかし、結局、ナリヒトは彼女に声を掛けることにした。

まだ10月とは言え、凍死してしまうことも、もしかしたらあるだろうし、何よりも新宿のど真ん中の公園で全裸の女性を放っておいたら、どうなるか分からない。

ナリヒトは自分がレイプ犯と間違われないように、周りに誰もいないことを確認し、着ていた薄手のジャンパーを彼女の肩にかけ、声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

返事はない。ただ穏やかに寝息を立てている。

ナリヒトは彼女の顔を覗き込み、彼女がまだ高校生くらいの年齢であることを知った。

もしかして、酔っぱらってそうしているのではない？

ナリヒトはその事実にも、全裸で倒れているその女のことが一層心配になった。

「大丈夫ですか!？」

ナリヒトはさらに音量を挙げて繰り返す。

すると、彼女はうーんと唸なり、パツとロボットが起動するがごとく、突然目を見開いた。

まるで、今まで寝ていたのは演技だったかのように。

「・・・ダレ？」

彼女は倒れたまま、驚くナリヒトにそう言った。意識ははっきりしているようだ。

そして、自分が全裸で公園にいることにもちゃんと気付いている。それを踏まえて、彼女はそう聞いているのだ。

「大丈夫ですか？」

ナリヒトは彼女の質問を無視して聞く。

正直どうしたらいいのかよく分からなかった。

なぜ彼女はこんな状況でもすごく堂々としているのだろう。

それに、ジャングルジムにもたれかかったまま、体はまったく動かせない。

「ダイジョウブ……。あたしは……。ダイジョウダと思う……」

┌

彼女はまるで外人みたいに片言でそう言った。

しかし、本当に外人というわけでもなさそうだ。

長い髪の毛と、切れ長の目は黒い。

顔立ちこそはしっかりしていたが日本人の顔だ。

ナリヒトは、凜としつつも、まだ幼く、あどけなさを残した彼女の美しい顔に見とれ、同時にドキドキした。

見方によっては彼女は作りモノの人形のようにも見える。

23歳にして未だ、女性経験のなかったナリヒトは、全裸で一向に動かず、再び黙り込んでしまった美しい彼女に対して、どう話しかけたらいいのか分からなかった。

そもそも、それ以前に彼女は何者なのか？

ナリヒトは分からなかった…。

ただ一つ言えるのは、彼女は人形ではないということだった。

その時の彼女には、確かに『生命』が宿っていた。

つづく

『聞こえる』く2く

『聞こえる』

く2く

必死に走り続け、息が上がってくると、トオルはあることに気づく。
誰もいないのだ。

誰一人、人間がいない。車も通らない。
もしかしたら、動物もいないのかもしれない。

トオルはその怖ろしい事実を打ち消すために、走りながら『誰か』
を探す。

しかし、いくら走れども誰一人いない。

何なんだ？

何なんだ？

トオルはこの状況に狂いそうになる。

どおんどおんどじじじ

どおんどおんどじじじ

例の音も未だ、鳴り響いている。

『これは夢だ！』

そう言ってみる。
確かめるために。

『これは夢なんだ！』

繰り返す。

そうであることを祈って。

しかし、何も変わらない。

これは夢じゃない。現実なのだ。

その事実にも、トオルは打ちのめされる。失望する。
僕はおかしくなってしまったのかもしれない。

トオルが自分自身を疑うようになると、突然、夜がきた。それは本当に、突然の夜だった。

さつきまで明るかった景色は、一瞬にして暗くなり、暗闇がトオルの視界を奪う。

当然、トオルはそれに驚愕する。立ち止まる。最初、何が起きたのか分からなかった。

急に、目が見えなくなったのかと思ったのだ。しかし、自動センサーなのだろう街頭が明りを灯すと、トオルは夜がきたというその不可解な事実を知った。

本当におかしい。

ここは夢じゃないのだろうか。何度も何度も、そのことを確かめてみる。

しかし、目覚めることはない。これがもし、夢であるのなら、これだけ頬をつねれば、目覚めていはずだ。

トオルは今まで味わったことがないようなドロリとしたネバツキのある恐怖を感じていた。

全速力で走ったこともあり、体中から流れる汗が恐怖と交じり、凍てつくような震えを起こす。

寒い。

気付けば、トオルは冬だというのに、ジーパンにロングTシャツし

かきていなかった。

しかし、家に戻ることは絶対にできない。

トオルは、自分の両親のあの光景はもう二度と見たくなかった。

そんなことを考え、ぶるぶる震えていると、トオルは突然呼ばれた。

『おーーーーーい！！！！少年！！！！』

トオルは振り返る。

しかし、誰もいない。

『くくくじゃ！くくく！！下！！下！！下！！』

下を見ると、驚いた。

こんな小さい人がいるなんて。

小人。トオルの足元には、えんぴつくらいの大ささしかいない小人の老人が、その存在を必死にアピールしながら、立っていた。

『なんで、そんなに小さいんですか？』

トオルは思わず、小人に聞いてしまう。

『ワシは小さいか？』 小人は聞き返してくる。

『うん。小さいです、とても』

『じゃあ、大きくなるう！それが望まれるのであれば・・・』

そう言うと、小人はみるみる大きくなっていった。
身長がぐんぐん伸びる伸びる。

えんぴつくらいだった小人の体は、トオルの腰くらいまで大きくなり、同じくらいの大きさになり、トオルの身長をついに追い越す。

しかし、まだまだ止まらない。

小人はいまや、小人ではなくなっていた。

2 m、3 mと伸びていき、電線くらいの大きさになっていく。もはや、巨人だ。

そして、その勢いはまだまだ止まらない。

驚愕したトオルは、再び、そこから走って逃げ出した。

このままでは、つぶされてしまう。

そう思ったのだ。

どおんどおんどじじじ

どおんどおんどじじじ

恐怖は終わらない。

じじじ

『AM4:56のメリーゴーランド』 〵〵

『AM4:56のメリーゴーランド』

〵〵

結局、ナリヒトは、全裸の月女を彼の住まいでもある居酒屋に連れて帰ることにした。19才の時に片親だった母をなくして以来、彼はそこで住み込みで働いている。

そこには、女主人のサユリさんがいるし、彼女をどうにかしてくれるだろう。

なぜだか分からないが、救急車を呼ぼうとは思わなかった。ナリヒトの直感が、それは相応しくないと言ったからだ。ナリヒトはよく、自分の直感に従う。

今まで、何かに迷った時はいつもそうしてきた。

母が死に、居酒屋で働くことにしたときも直感による選択だった。

そして実際、その直感による選択はいつも、彼を良い方向へと導いてきた。

ナリヒトにはそういう力が備わっていた。
もちろん、本人はそれが運によるものだと思い、その直感自体の特
別さには気付いてはいなかったが。

月女は公園にて、「ダイジョウブ」と言うと、再び寝てしまい、そ
れ以来、まったく動かなくなった。まるで、電池の切れたおもちゃ
のように。

寒さのせいか、衰弱していたのだろうか。

ナリヒトは抵抗しつつも、仕方なく、全裸の彼女をおぶり、誰にも
見られないように注意して小走りで居酒屋へ向かった。

まったく、何なんだろう？

この子は……。

ナリヒトは呆れ、不審に思いながらも、背中に感じる彼女の温もり
に、胸が高鳴って仕方がなかった。

「ええ！？ナリちゃん！！どうしたの！？その子！？」

ナリヒトが帰ってくると、サユリさんはそう驚嘆した。

彼女は夫に先立たれてから長い間、一人で居酒屋を切り盛りしてき

ただけのことはあり、大抵のことには物怖じしない肝の据わった人だったが、さすがに驚いたらしい。

当然だ。

普段、真面目で口数の少ないナリヒトが、彼のジャンパーをはおっただけの、ほぼ全裸の女の子を連れて帰ってきたのだから。

「サユリさん、この子は公園で、全裸で倒れていて……。とにかく、体を温めないと…」

「ええ！？ああ、そ、そうね。わかったわ」

ナリヒトがそう言うと、サユリさんは急いで彼女を連れ、浴室へ向かった。

くわしい事情を聞く前に、まず大事なことをする。彼女は、よく分かっている頭の切れる女性だった。

とりあえず、月女をサユリさんに預け、一安心したナリヒトは居酒屋のカウンター席に座り、頭を整理した。

彼女は何者だろうか？何であそこに倒れていたのか？そして、なぜ全裸で？

片言だったのは？やっぱり、事件に巻き込まれたのだろうか？

いくつもの彼女にすべき疑問が頭に浮かんでくる。
しかし、彼女が回復しないことには全て推測であって、何も分らない。

果たして、自分がここに彼女を連れてきたのは正しかったのだろうか？

ナリヒトはなぜだか、胸騒ぎを感じていた。

つづく

『聞こえる』くっ

『聞こえる』

くっ

どれだけ走っただろうか。
突然、巨大化を始めた小人に思わず、逃げ出したトオルは再び、息を切らし立ち止った。

相変わらず、夜だし、誰もいない。
トオルはそれがとても怖く、寒さと相まってぶるぶると震える。

おかしい。
どうも考えてもおかしい。
夢ではないのなら、ここはどこなんだ。

トオルは自分が不思議の国のアリスになった気分になった。
両親はゾンビと化し、急に夜になり、巨大化する小人まで現れた。

全てがわからない。そして、怖ろしい。

トオルはこの状況に泣きだしそうになる。

自分は不思議の国に来てしまったのだろうか。

一瞬、そう考え、そしてすぐに馬鹿馬鹿しいと思う。
小学4年生でトオルでもそれくらいのは分かる。

ここはまぎれまなく現実だ。あるいは、覚めることのない特殊の夢
なのかもしれない。

いずれにしろ、もっと冷静になるべきだ。
トオルは、今日のことを思い返す。

何のせいで、こんな風に世界は変わってしまったのか。

まず、今日はいつもより早く起きた。

トオルは小学校がある平日は、母親に起こされなければ起きれなかつたが、休日は違う。
学校に行かなくていいと思うと、なぜか不思議と勝手に目が覚めてしまうのだ。

もちろん、日曜の今日もだ。そして、今日は6時に起きた。
いつも7時半に起きるトオルにとっては、それはすごいことだった。

しかし、早く起きたから、こんな世界になったのだろうか。

トオルは考える。

やっぱり自分は起きた気になっているだけで、まだ眠っているのかもしれない。

その可能性は捨てきれない。

しかし、もしそうであるなら一刻も早く起きたい。

トオルはもう一度、頬が赤くなる程、強く頬をつねってみる。

痛い。それだけだった。

起きた後はどうしただろう。

トオルは再び考える。

まず、リビングに降りた。

両親はまだ眠っているし、両戸も閉まっているのでリビングはまだ暗い。

それから、両親の寝室に突撃して、二人を無理やり起こした。父母ともに、トオルの悪ふざけに笑いながら怒る。

休日に早く目が覚めてしまつトオルはよくそうして、二人を起こしていた。

そして、今日も二人はいつも通りの反応だった。この時は、二人は

まだマトモだったのだ。

それからどうしただろう。

急に、トオルは何かを忘れていている気がした。

何だろう。トオルは考える。しかし、思い出せない。分からない。

何かが欠けている？いくら考えても、トオルはソレを思い出せない。まるで、ポツカリと穴が開いてしまったようだ。

仕方ない。トオルは次にしたことを考える。

おそらく、朝食を食べた。

食パンとソーセージと目玉焼き。それに牛乳。

特別、変わったものは食べていない。

トオルの家では、いつもどおりのオーソドックスな朝食だ。

それを食べ終わると、父親が『今日は日曜だから、どっか行こう』
と言いだした。

トオルは遊園地を主張したはずだ。

そして、今度は母親が『じゃあ、宿題を終わらしたら行きましょう』
と言いだしたので、トオルは大急ぎで二階の自分の部屋に駆け上がり、忌々しい宿題を始めた。

それだけだ。

思いだしたところで、何にも変わったことはない。

それから、音がしたんだよな。

音。

そして、トオルは思いだす。

あの音だ。あの大地のリズムが鳴り始めてから、こうなったのだ。

気がつけば、今はあの音がしない。

いつの間にか、それは止まっていたのだ。

トオルはそのことに安堵した。

あの音は不安をあおるの。

よかった。

と思った瞬間だった。

どおんどおんどじじじ

どおんどおんどじじじ

ソレはまた始まった。

つづく

『AM4:56のメリーゴーランド』くっ

『AM4:56のメリーゴーランド』

くっ

『サユリさん、彼女は!?!』

サユリさんが、居住区から、ナリヒトのいる居酒屋部分(まだ客はいなかった)に戻ってくると、ナリヒトは思わず、声を荒げた。

『大丈夫よ。お湯に浸からせてあげて、それから今はお布団で寝ているわ。なんだか、とても疲れていたみたい。お風呂でも寝ちゃって大変だったわ。それより、ナリちゃん。あの子どうしたの?もちろん、聞かせてくれるわよね?』

ナリヒトは在った通りのことをそのまま話した。

サユリさんに頼まれて近所のスーパーに買い物に行った途中、公園で全裸の彼女を見つけて、ここに連れてきたこと。

単にそれだけだった。
何も隠すことはない。

ナリヒトの話を黙って聞いていたサユリさんは、ナリヒトが話し終わると『そう』と頷くだけで、特に何も言わず、急に立ち上がり、居酒屋の料理の準備を始め出した。

常連客の何人かは、大体9時を回るといつもやってくる。
現在、時計は8時45分を指していた。

『あの、すみません』

ナリヒトは謝った。

『何が？』

『いきなり、あんな得体のしれない子を連れて帰ってきて』

ナリヒトは住み込みで働かせもらっているアルバイトにすぎなかった。
た。

自分のした行為はサユリさんにとって迷惑だったに違いない。

ナリヒトは罪悪感を感じた。

しかし、サユリさんはナリヒトのすまなそうな顔を見るとニッコリ笑った。

『いやだわあ、そんな私が意地悪おばさんに見える？何はともあれ、あんなカワイイ子を裸で放っておけないわよね。逆に、ナリちゃんを見直しちゃったわ。いつもは、お客さん相手に、はにかんでいるのよね』

そう言われ、ナリヒトは、何も言えずに、はにかんだ。

それを見て、サユリさんは一層顔にシワを作って笑った。

『もう一度、大根買ってきます！』

月女については、回復しないことには何も分からないだろう。

それよりも今は、数少ない常連客のための料理の仕込みが大事だ。ナリヒトは再び、スーパーへ向かった。

U
U
U
U

『聞こえる』く4く

『聞こえる』

く4く

どおんどおんどくどく

どおんどおんどくどく

その音は止まらない。

トオルは次第に吐き気がしてきた。

一体この音は何なんだ。

おそらく、それはトオルの中で鳴っている。

そのことにトオルはなんとなく気付いていた。

なぜなら、周りには誰も何も存在しない。

自分しか聞いていない、自分のためだけの音なのだ。

どおんどおんどごじ

どおんどおんどごじ

その音はどんどん大きく早くなっていく。
目が回る。

なんだ、これは。

自分が上から引つ張られて、引き延ばされていくような感覚だ。
気持ち悪い。

どおんどおんどごじ

どおんどおんどごじ

トオルはあまりの気持ち悪さに耐え切れず、その場で倒れた。
しかし、まだ引つ張られるような感覚は続く。
ダメだ。僕は死んでしまう。

そう思った次の瞬間、トオルは授業を受けていた。

見慣れた4年2組の教室。

トオルのクラスだ。

何だ夢だったのか。

トオルは心の底からほっとする。

ただ自分の席で居眠りをしていただけだったのだ。

よかった。

そう思い、周りを見渡すと、隣の席の横山さんが目で合図をしている。

『え？何？』

『何じゃない！！』

突然、トオルはゲンコツを食らった。

鬼教師として嫌われている島村先生だ。

クラスメイト達の笑い声上がる。

『何授業中に寝てるんだ！！そんなに寝たいなら、一生眠っているか！！』

『いえ、すみません』

トオルは素直に謝る。

普段、真面目なトオルは居眠りをすることはほとんどなかった。

気付けば音はまだ続いている。
トオルはそれに気付いた。

まだ悪夢は終わっていないのだ。

『うわああー!!』

トオルは絶叫し、島村先生に掴まれた手を振り払い、先生を突き飛ばす。

しかし、トオルは気付いた。

顔が溶けているのは島村先生だけじゃない。

隣の席の横山さんも、前の席のトモくんも、学級員のおまつちも、みんなみんな顔が溶けている。

『うわああああー!!』

トオルが叫ぶのと同時に、クラスのみんなは一斉に立ち上がり、トオルに向かってくる。

どおんどおんどんどん

どおんどおんどんどん

その音はトオルの中でより大きくなって響き渡る。

つじく

『A M 4 : 5 6 の メ リー ゴー ラ ン ド』 〵 4 〵

『A M 4 : 5 6 の メ リー ゴー ラ ン ド』

〵 4 〵

翌日、居酒屋二階の自分の部屋でナリヒトが目を覚ますと、布団の前で月女が立っていた。

当然、ナリヒトは驚いた。

彼女はいつからそこにいたのだろうか。

目を覚ましてもお、月女は未だ無言でナリヒトを見降ろしている。

『あの、もう大丈夫なの？』

ナリヒトが恐る恐るそう聞くと、月女は無言で頷いた。

どうやら、昨日は単に眠っていただけらしい。

ナリヒトはひとまず、彼女に（救急車を呼ぶ必要があるような）問題がないことを知りほつとする。

ここに連れてきた判断は、ひとまずは悪くなかったのかもしれない。

『・・・いっはん』

『えっ..』

『いっはん出来た・・・。呼んで来いって言われた・・・』

彼女はそう言うと、驚くナリヒトを置いて下の階に行ってしまった。おそらく、サユリさんに言われたのだろう。

ごはんか。

彼女は本当に片言だ。

昨日も思ったが、彼女は本当に日本人なのだろうか？
そんなことを考えながら、ナリヒトは着替えて、下の階に向かった。

『あらナリちゃん、おはよう』

『おはようございます』

ナリヒトの顔を見ると、サユリさんはいつも通りニコヤカに挨拶してくれた。

彼女は、住み込みで働いているナリヒトの分もいつも朝食を作ってくれる。

そして今日も、台所に立ち、朝食の用意をしてくれている。
ただ、ひとつ違うのは、食卓に月女が座っていることだった。

『あ、ナイラちゃんは、もう大丈夫みたいよ』

ナリヒトが月女の存在に戸惑っていると、サユリさんはそう言った。

『ナイラ？』 ナリヒトは聞きなれない名前に思わず聞き返す。

『ネモト・・・、ナイラ・・・。アタシの名前・・・ネモトナイラ・・・。
もう大丈夫』

月女・・・ネモトナイラと名乗った少女は、そう言うとナリヒトをじっと見つめた。

それは、まるで何かを警戒するような、監視するような疑り深い目でもあり、同時に何かを訴えかけているような、そんな目だった。

『なら、よかった・・・。えっと、僕は神崎ナリヒト。ところで君は何で、あそこにいたの？』

ナリヒトは直球で彼女に質問した。

彼女をここに連れてきたことは果たして本当に正しかったのだろうか。

『カン・・・ザキ、ナリヒト・・・。ナリ・・・人？・・・あそこ？』

ナイラはナリヒトの名前を繰り返し、聞き返した。まるで、言葉がつまぐ理解できないかのようだ。

『市民公園だよ。君はあそこで倒れていたんだろう？』

『シミン・公園・・・？』彼女はまた繰り返す。

『そう。市民公園！』

『ちょっと、ナリちゃん。まだナイラちゃんも回復したばかりなんだから』

サユリさんは味噌汁を食卓の上に置きながら、そうナリヒトを制した。

ナリヒトはナイラの言動に思わずイラついて、大きな声になってしまったのだ。

『ああ、すみません。でも、彼女に・・・』

『はいはい。話は後で聞きましょう。今はご飯よ。ほら、ナリちゃんも座って』

サユリさんはそう言って、ナリヒトを食卓に座るように促した。ナリヒトは大人しく、それに従った。

しかし、ナリヒトは彼女のことを気になって仕方がない。なぜ、公園に全裸でいたのか？なぜ片言なのか？聞くべきことは山のようにあるのだ。

『・・・わからない』

サユリさんから箸を受け取ると、突然、彼女は呟いた。

『わからないって何が？お箸の使い方？』サユリさんは冗談交じりに言う。

『チガウ……。アタシ、公園になんていたか……。分からない……。思いたせない……。』

それを聞いたナリヒトは心の中でため息をついた。

まったく、自分が連れてきたのは、記憶喪失少女だったのか。

もし、それが本当なら、聞こうと思っていた質問リストの中から、何を聞いたって意味がないじゃないか。

ナリヒトは、彼女をここへ連れてきたという自分の判断が間違っていたことを知った。

あの時、素直に救急車を呼ぶべきだったのだ。

UJU<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4356j/>

『聞こえる』と『Am4:56のメリーゴーランド』

2010年10月21日20時10分発行